

ZOOM

風情 文芸 小説

写真劇場

今を生きる ^{すすき} 薄エッセー ^{すまひきよし} 須磨久善 写真 ^{おおいでかずひろ} 大出一博

秋は寂しい、と子供のころ思っていた。楽しい夏休みが終わり、寒い冬がやってくる。海水浴に潮干狩り、日焼けした肌にパンツの跡がやけに白く残っている。去りゆく夏の忘れもののように。

秋風がひんやりと肌をなではじめると、すすくと育ったおおせいの薄たちが自分の背丈を越え、満月の夜には兔がお月さまの中で踊っている。何と気味悪いことだろう。大人たちは月見だ、紅葉狩りだ、馬肥ゆる秋だと、はしゃいでいる。私は独りぼっちで寂しさと向き合っていた。

そんな私が還暦を過ぎ、この夏に日々願ったのは「秋よ来い」。あの暑さ、耐えられないのは年のせいだけではないはずだ。軽井沢でクーラーが飛ぶように売れるなんて誰が予想しただろう。今年の春に16歳目前で逝った愛犬ごう太がもし生きていたら、朝の散歩は夜明けとともにになっただろう。焼けたアスファルトの上など歩けはしない。

2020年にオリンピックが東京にやってくる。1964年に開催された時、私は14歳で三波春夫の「東京五輪音頭」を聴きながら東洋の魔女たちに声援を送っていた。マラソンではアベベが疾走し、円谷幸吉が必死でそのあとを追ってメダルを獲得した。今から7年後、東京の夏はどうなっているのだろうか？ マラソン選手たちの熱中症が今から気になるのは私が医者だからというだけではないと思う。

ようやく来た秋の気配に包まれて、薄のなかで微笑む美女。身に纏った着物を見て「群青」の一節が浮かんでくる。「手折れば散る薄紫の野辺に咲きたる一輪の花に似て、儚きは人の命か……」。今を大切に生きること、CARPE DIEMが大切ですね。

